

JASIS NEWS

No. 48

2011/4/5

日本インテリア学会会報

■学会設立20周年記念事業完了報告

第22回大会を終えて

学会長 高橋鷹志（東京大学名誉教授）

20周年記念事業の「学校用家具デザインコンクール」に続いて進められてきた「コンパクト設計資料—インテリア編」が、当原稿を書き始める直前に完成した。これは日本建築学会との共同著作であり、編集・執筆に携わられた各位に厚く感謝する次第である。ぜひ会員各位からの評価を戴きたくお願いしたく存じます。

次に昨年（2010. 10. 23～24）に大阪樟蔭女子大学で第22回大会が小宮容一大会長の下に開催された。「学校家具デザインコンクール」作品展、大阪名所見学会、高田光雄先生（京都大学）の特別講演、論文発表・パネル発表（60点）、卒業作品展（第17回、出品15校）などの催しが行われ、充実した2日間を体験することができた。

さて、新しい年を迎えて、当学会はどのような歩みを進めたらよいのでしょうか。この点に関しては次の大会でも議論すべき問題であり、会員各位におかれましてもお考えをまとめておかれることを期待する所です。これまでの研究テーマからみても、対象は住宅のインテリアが主体になっており、今後もその傾向は続くものと考えられます。これには、住宅のインテリアには住人の許可なしに入ることはできない、プライベート環境であることが直接の原因となっています。当然、親戚や友人の家のインテリアに招かれることも多いのですが、それは全居住者のごく限られたものに過ぎないのです。

また、新築住宅のインテリアは雑誌等に掲載されているが、住み始めてからの状況は不明なのである。私個人としても、種々の住宅のインテリアの物理的・行動的

環境の様態を知りたいという欲求に捉われているが、実際には不可能なことである。そこで筆者の思い付きではあるが、当学会の会員の住宅のインテリアの見学会の機会を設けるのは如何なものであろうか。街に出ている人々の服装・持物などは見ることができるのだが。

一方、以前にも指摘したことではあるが、インテリアは住宅あるいは種々の建物内部だけではなく、人びとが行動する環境すべてに存在しているのである。この原稿を書いている書斎の窓から見える、外の道路・車・建物・緑・電柱・電線・アンテナ・設備機器も私にとっては私物ではないが、生活のインテリア環境なのである。その中には私自身が見苦しく、心理的に耐えがたいものもある。現在、バリアフリー環境が整備されているが、それは人々の移動を対象とするものであり、心理的障害を取り除いた心理的バリアフリーの環境整備が急務であるとする。学会の研究会の一つとして、ある街を対象として。街歩きをして、心理的バリアフリーの状況観察を進めては如何なものであろうか。

追伸：東北関東大地震および福島第一原発発電所の事故によって被害を受けられた皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

■第22回日本インテリア学会大会（大阪）概要報告

大会実行委員長 郷力憲治（大阪樟蔭女子大学）

第22回大会が大阪で開催されることとなり、小宮容一関西支部長を大会長とし、19名の実行委員会が結成された。

当初第6回AIDIA（アジアインテリア学会）大会の日本開催が検討され、AIDIA大会を関西支部で受けるなら、日本インテリア学会大会を同時に開催してはということになり、是非大阪で国際会議をと一同身の引き締まるおもいで、準備をはじめて半年、加藤 力先生の多大なご努力にもかかわらず、中国の強引な主張と希望により中国南寧での開催が決まり、準備委員会諸氏の失望は計り知れませんでした。しかし、学会の皆様の暖かいご支援により、悔しさを梃に第22回大会（大阪）に向けてその想いを再燃させることになりました。

2月初旬の第1回定例実行委員会では、開催日を8ヶ月後の10月23日（土）、24日（日）の両日と決定。大会テーマ、見学会、特別講演、懇親会など全体の企画をおこない、当番校である大阪樟蔭女子大学の位置する河内平野から“水都大阪”をにらんだ企画とし、正門前を流れる長瀬川（旧大和川）の風土と歴史をてがかりとして、逞しくじつのある「大阪の居住文化とインテリア」をテーマとして展開することになりました。

大会初日は、第17回卒業作品展と学校教室用家具デザインコンクール作品展の開催に始まり、午後より見学会は本学近隣の、樟蔭学園樟徳館（登録有形文化財）、学園創設者森 平蔵旧邸を基点に長瀬川を北上し、鴻池新田会所（国史跡・重要文化財）、大阪市立住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館の3箇所を選定し、樟徳館では銘木を多用した和洋折衷のインテリアから、材木商としてのこだわりと昭和初期の商都大阪の息吹を感じていただき、鴻池新田会所では、新田経営のなかで生み出された、飾り気のないおらかな造作や水利のあつかい、そして大阪平野の成り立ちや江戸期の和川付け替えによる、新田開発の歴史と大阪という町の形成過程を知っていただき、江戸から明治、大正、昭和へとつながる「こうと」な大阪の町屋文化に触れていただけるよう意図し、大阪人の気質や行動規範についても幾許かご理解いただけたのではないのでしょうか。

懇親会の会場は本町、東横堀川畔の「シティプラザ大阪HOTEL & SPA」御堂筋と堺筋の間、昔なら船場のど真ん中、豪壮な大阪の商家が薈を連ねたあたり、今はカジュアルなインテリアのホテル。小宮容一大会長の開催挨拶、ご高齢にても益々お元気な高橋鷹志学会長のご挨拶のあと。ご来賓の近畿経済産業局田口一江室長に出張先の金沢より着物姿で駆けつけていただき、開宴間際のご到着にホッと、加えて関西のインテリア関連協会のかたがたよりお祝辞をいただき、直井英雄学会理事のご発声により乾杯！和やかに開宴の運びとなりました。

大会2日目は開会式、論文発表（午前）、理事会（昼食）をはさんで特別講演、学校教室用家具デザインコンクール表彰式、論文発表（午後）、パネル発表そして閉会式と盛り沢山のスケジュール。12時少し早目に特別講

演の講師をお願いした京都大学高田光雄先生が到着、地下の学生ラウンジで、今大会話題の昼食をご一緒に、講演テーマ“大阪の居住文化とインテリア”が昨日の見学会とうまく連動できるか、大阪谷町・空堀・上町台地あたりのはなしで大阪人の想いが伝わるか、とそわそわしながら委員会みんなでこだわったお弁当、日本料理うめ原の「温つものは温ついうちに！」をいただいた、「とても納得できた！」本当に地味でささやかなことだが、こんなところに大阪がしっかりと息づいているのではないだろうかと思った。講演会は無事におわり、続いて学校教室用家具コンクールの表彰式へと展開し、優秀賞・佳作・奨励賞の9作品が表彰を受けられた、若手の研究者が登壇し学会の新しい風を少し感じることが出来た。また、昨日から記念館1階183教室で開催している、教育部会主催の第17回卒業作品展も5月頃から作品の受付を行い、会期当日到着もあり出品校は大学・大学院27（グループ1）、短期大学1、専門学校2、高等学校4（グループ2）計34作品で、高橋学会長以下4名の審査員で審査を行い最優秀作品賞1点、優秀作品賞3点、奨励賞1点を選出しました。いよいよ大会も終盤となり、朝に開会式をおこなった2号棟2階の円形ホールで無事閉会式を迎えるはこびとなりました。

大会参加107名、大会発表論文55題、作品発表5題を得て、小雨降る秋冷の宵、すべての行事を終えことが出来たことは、学会本部の諸先輩各位のご理解はもとより、実行委員会諸氏の熱い気持ちとご協力の賜物と感謝を申し上げますと共に、学内でサポートしていただいた職員や学生の皆さん、こころよくご支援いただいた学校に対して謝意を表し、ご参加いただいた会員・関係各方面の方々にも感謝申し上げます。

■日本インテリア学会第22回大会 大会実行委員

大会長	小宮 容一	
実行委員長	郷力 憲治	
副実行委員長	塚口眞佐子	
幹事	鈴木 儀雄	
幹事	北浦かほる	
実行委員	石橋 實	中村 孝之
	井上 徹	西山 紀子
	植松 暁子	ペリー史子
	大江 孝	松田奈緒子
	片山勢津子	山内 一弘
	来海 素存	横田 哲
	近藤 雅之	和田 仁見



会場正門（大阪樟蔭女子大学）



見学会（大阪くらしの今昔館）



懇親会（シティプラザ大阪HOTEL & SPA）



特別講演（京都大学高田光雄先生）



学校教室用家具コンクール表彰式

■日本インテリア学会第22回大会 発表プログラム

A 論文発表部門

【計画1】

座長：片山勢津子（京都女子大学）

001 「セカンドライフの住まい」の提案設計に関する報告と考察；小宮容一（芦屋大学）・鈴木儀雄・山本紗代子・井上徹

002 団地の住まい方の履歴とその記録ー多摩NT初期建設団地に住み続けた2家族を事例としてー；高橋正樹（文化女子大学）

003 住まいにおける家族の居場所に関する実態調査ー統柄別にみた居室や机の専有状況についてー；木下勇太郎（日本大学大学院）・若井正一

004 福島県南会津郡旧館岩村に立地する「民宿」の生活実態に関する一考察；星ルミ子（日本大学大学院）・若井正一

【計画2】

座長：若井正一（日本大学）

005 平面計画の質的評価に関する研究（7）ー戸建分譲住宅の平面計画に関する考察ー；横田哲（SI住宅研究室）

006 部屋からスペースへ（その3）ーコルビジェのステューディオタイプに見るインテリアの近代にかかる思考実験ー；灰山彰好（Studio HAIYAMA）

007 政府永久賃貸アパートに住む高齢者の日常生活から見た住まい方に関する研究ー韓国のソウル市T地域の高齢者を対象とした事例調査ー；金明鎬（東京大学大学院）・西出和彦・古賀紀江

008 こどもの行動観察に基づく空間デザイン発想の考察ーこどもOSランゲージからデザインコードまでー；川本誓文（大阪府産業デザインセンター）・中村孝之

【計画3】

座長：西出和彦（東京大学）

009 地域密着型スーパーマーケットのコミュニティ空間となり得る場所についてー広島市内の地域密着型スーパーマーケットにおけるコミュニティ空間に関する研究 その1ー；平田圭子（広島工業大学）・向井智之

010 アンケート調査による休憩スペースの利用状況についてー広島市内の地域密着型スーパーマーケットにおけるコミュニティ空間に関する研究 その2ー；向井智之（広島工業大学大学院）・平田圭子

011 住宅におけるトイレ内行為からみた現代のトイレのあり方に関する研究；市原瞳（広島工業大学大学院）・平田圭子

012 ネット世代の子供室の研究ーネット世代に属する子供の子供室の傾向から現代の住宅像を考察するー；長谷川公彦（工学院大学大学院）・鈴木敏彦

【計画4】

座長：平田圭子（広島工業大学）

013 外出及び帰宅時における行為と玄関のモノに対する接触個所との関係；坂田礼子（早稲田大学大学院）・林田和人・渡辺仁史

014 知的障がい児の障がい程度と個室・多床室の違いによる飾りつけの差について；藤井容子（東京大学大学院）・西出和彦

015 空間の変節点における認知的ユーザビリティに関する研究その1 出入り口扉について；西山紀子（京都橘大学）

016 枕の商品開発と販売戦略に関する一事例；松崎元（千葉工業大学）

【計画5】

座長：松田奈緒子（京都工芸繊維大学）

017 新しいワークスタイルの在り方ーインフォーマルコミュニケーションとしてのワークスタイルー；三平真樹子（工学院大学大学院）・鈴木敏彦

018 空間おもちゃに関する研究 新しい概念の構築とそれに基づくスタディモデルの制作と検証；木村望（首都大学東京大学院）・鈴木敏彦

019 ブーリアン演算によるデザイン造形の研究；高橋岳人（首都大学東京大学院）・鈴木敏彦

020 「照明建築」に関する研究 カテゴリーの定義とその概念モデルの制作と評価；竹内祥馬（首都大学東京大学院）・鈴木敏彦

【計画6】

座長：鈴木敏彦（工学院大学）

021 居住者タイプに適した浴室デザイン提案ー韓国ブランドアパートの小型を中心にー；申京珠（Hanyang Univ）・李知憲・文書賢

022 韓国の鉄道旅客施設室内における交通弱者利用便宜増進のための改善方案研究ー空港線の旅客施設を調査対象としてー；文書賢（東京大学大学院）・申京珠

023 空間の自己化とその表出に関する研究 その12ーフランス人学生と日本人学生の比較ー（2）プロトコルから見る表出特性ー；松田奈緒子（京都工芸繊維大学）・加藤力

024 インテリア空間に表出される精神の病みに関す

る調査研究—その3 インテリア空間から見る精神の病理—；加藤力（宝塚大学）・松田奈緒子

【計画7】

座長：高橋正樹（文化女子大学）

025 日経ニューオフィス賞受賞企業におけるミーティングスペースの面積と配置 —2006年～2009年を対象として—；伊倉祥範（千葉工業大学大学院）・白石光昭

026 インテリアコーディネーターの活用実態と活性化について—インテリアコーディネーターの現状と課題3；上田亜季（エイチユーティー）・河合秀美・片山勢津子・加藤力

027 インテリアの表現と図面のルール；河村容治（東京都市大学）・川島平七郎・奥田宗幸・岡田悟・長山洋子

028 ICカードによるユニバーサル社会技術システムの開発について —インテリア空間行動を変える社会構造設計事例 その1；湯本長伯（九州大学）

【計画8】

座長：長山洋子（文化女子大学）

029 インドアグリーンの心理・生理的指標による評価と応用；近藤雅之（積水ハウス（株））・中村孝之

030 ひとと犬の共生環境についての与件と考察—ペット生活工学研究 その3—；河崎由美子（積水ハウス（株））・沢辺泰代

031 ひとと猫の共生環境についての与件と考察—ペット生活工学研究 その4—；沢辺泰代（積水ハウス（株））・河崎由美子

【人間工学1】

座長：渡辺秀俊（文化女子大学）

032 階段昇降のモチベーションに対する空間およびしかけの効果—住宅内の生活行動におけるモチベーションに関する研究 その1—；斎藤純平（早稲田大学大学院）・井上友香理・長澤夏子・林田和人・渡辺仁史

033 家事活動におけるモチベーションを喚起する手法—住宅内の生活行動におけるモチベーションに関する研究 その2—；井上友香理（早稲田大学大学院）・斎藤純平・長澤夏子・林田和人・渡辺仁史

034 幼児用学習机における囲み空間に関する研究（1）—幼児が「寄りつく」入り口開口部の形状について—；木戸大祐（早稲田大学大学院）・西隆明・道垣内まゆ・浅田育男・林田和人・渡辺仁史

035 幼児用学習机における囲み空間に関する研究（2）—幼児が「居つく」囲みの形状について—；西隆明（早稲田大学大学院）・木戸大祐・道垣内まゆ・浅田育男・林田和人・渡辺仁史

【人間工学2】

座長：白石光昭（千葉工業大学）

036 トイレブースにおける折戸と開戸の特性に関する研究—その2. 荷物の有無が出入り動作に与える影響—；高橋未樹子（コマネー（株））・岸涼・上野義雪

037 インテリア空間における動線の有効利用に関する研究（4）—階段踊り場の急な曲がり部に設置する縦手摺の役割—；穴沢舞（（有）ミノリ）・上野義雪

038 安全な車いす降行のためのスロープ形状に関する実験研究；布田健（（独）建築研究所）・垂井建吾・直井英雄

039 ハンドル形電動車いすの通路走行に関する基礎的研究 その4—ハンドル形電動車いすの走行状況と使用者の注視特性との関係—；石橋達勇（北翔大学）・西岡基夫・猪井博登・木村直子

【人間工学3】

座長：布田 健（（独）建築研究所）

040 室内壁面に設置された物体との対話位置 ロボットと人間の相互交流に関する試行実験（その9）；西山有沙（文化女子大学大学院）・渡辺秀俊・高橋正樹・佐野友紀・林田和人・吉岡陽介・遠田敦

041 矩形テーブルにおける座席位置とコミュニケーション感覚；大場沙織（文化女子大学大学院）・渡辺秀俊

042 個体領域確保の観点から見た家具配置の評価；波多野舞子（東京理科大学大学院）・大竹宏之・久保田一弘・直井英雄

043 キッチン作業時に手が触れるキッチンエレメントの使用性評価に関する試み；上野義雪（千葉工業大学）・穴沢舞・上野弘義

【人間工学4】

座長：上野義雪（千葉工業大学）

044 正座位用椅子の座りやすさと身体支持条件に関する—考察；平林卓朗（日本大学大学院）・若井正一

045 地域材を使用した特別支援学校用机・椅子の開発；丸谷芳正（富山大学）

046 「いすの科学研究室」への来訪者とその意見・批判；浅田晴之（（株）岡村製作所）・内田和彦

【歴史1】

座長：河田克博（名古屋工業大学）

047 モダンデザインの背景を探るアヴァンギャルド住宅誕生における諸事情その3—反感から容認へ—；塚口眞佐子（大阪樟蔭女子大学）

048 「囲み」とその変容—Polazzo SPINI-FERONIをめぐる—フィレンツェ（イタリア）におけるインテリアと都市；その1—；山田智稔（相模女子大学）

049 福島県南会津町の歴史的建造物「曲り屋」の空間特性に関する研究；高田裕志（工学院大学大学院）・鈴木敏彦

050 戦後日本の主木製家具メーカーにおける家具スタイルの展開－伝統的ヨーロッパスタイル、カントリースタイル、モダニスタイル、ジャパニーズスタイル－；新井竜治（共栄大学）

【歴史2】

座長：山田智稔（相模女子大学）

051 C・R・マッキントッシュの空間構成の特徴－C・R・マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究（その11）－；高橋敏郎（愛知淑徳大学）

052 世紀末ウィーンにおけるコロマン・モーザーの空間デザイン；川崎弘美（パルナスインテリアルーム）

053 オーストリアにおけるヨセフ・フランクの2つの建築の改修について；八代美智子（名古屋造形大学）・河田克博

054 木内真太郎のステンドグラス－旧谷口房蔵邸、旧鴻池組本店－；金田美世（名工大学大学院）・清水隆宏・河田克博

055 ランブイエ夫人の設計術 ランブイエ邸の復元的研究；片山勢津子（京都女子大学）

B パネル発表部門

【パネル発表】

座長：加藤 力（宝塚大学）

056 りんご創作炭 VOC吸着性能を有すインテリアオブジェ；小川和彦（職業能力開発総合大学校）・谷澤實・遠藤裕之・西本右子・岡部敏弘

057 スギ圧縮木材による椅子；下平晴菜（森定興商（株））・高橋敏郎

058 飾る収納+隠す収納－インテリアエレメントとしての衣類収納具の新提案－；泉由貴子（文化女子大学）・木村戦太郎

059 地域コミュニティの場としての蔵の再生活用とインテリア空間；早野由美恵（東北芸術工科大学）

060 つつむ家 インテリアとしてのOrganic Unity；今井裕夫（京都橘大学）・船曳悦子

【計画2】座長：若井正一（日本大学）

【計画3】座長：西出和彦（東京大学）

【計画4】座長：平田圭子（広島工業大学）

【計画5】座長：松田奈緒子（京都工芸繊維大学）

【計画6】座長：鈴木敏彦（工学院大学）

【計画7】座長：高橋正樹（文化女子大学）

【計画8】座長：長山洋子（文化女子大学）

【人間工学1】座長：渡辺秀俊（文化女子大学）

【人間工学2】座長：白石光昭（千葉工業大学）

【人間工学3】座長：布田 健（（独）建築研究所）

【人間工学4】座長：上野義雪（千葉工業大学）

【歴史1】座長：河田克博（名古屋工業大学）

【歴史2】座長：山田智稔（相模女子大学）

B パネル発表部門

【パネル発表】

座長：加藤 力（宝塚大学）

□計画1

001は、第20回大会で発表したセカンドライフの住まいに関するアンケート調査報告と分析を受けて行われた、セカンドライフ住宅の提案設計である。「自己実現タイプ住宅」「終のすみか」「シェア住宅」の3タイプの提案があった。インテリアデザイナーとしての細部への配慮が見られるものの、アプローチには問題も見られ、フロアーから指摘があった。

002は、多摩ニュータウン団地の住まい方の履歴について、2家族の報告があった。ライフスタイルの変化にどのように住まいが対応してきたか、その変化の様子が分かる。住まい方の履歴は得難い資料である。是非、活用できる資料として残して頂きたい。

003は、住まいにおける居どころ調査で、専用の部屋と机の有無に着目している。父親については居どころが曖昧であるとして、3名の履歴が報告された。専用の部屋や机は、就職や結婚などの環境移行時に変化することが指摘された。家庭での居どころの在り方が、家族環境によって変わることが窺える。今後の研究の成果を期待したい。

004は、南会津郡旧館岩村にある民宿の生活実態についての調査報告である。宿泊施設としても家族の住まいとしても、現状からはかなりの問題が散見された。民宿施設のための計画指針を得るための研究として、興味深い。今後の調査と分析手法に期待したい。

（座長：片山勢津子）

□計画2

005（横田）は、戸建分譲住宅を対象に、その平面計画のゾーニングや部分空間などの諸条件が事業主の規模

■第22回大会研究発表講評

A 論文発表部門

【計画1】座長：片山勢津子（京都女子大学）

や分譲価格などとの関係性の有無について報告した。当該対象分譲住宅の内訳は、兵庫県神戸明石地区にある36社の事業主、計168棟であった。その平面計画の調査項目の中で、分譲価格と「廊下と玄関ホールの関係」や「回遊動線の存在」などに比例関係が存在するなどの興味深い報告があったが、その相関について具体的な数値の表示による解説が欲しかった。今後は、他の地域の分譲住宅との比較によって本研究が進展することを期待したい。

006（灰山）は、ル・コルビジェの作品のインテリアを対象にいくつかの透視図を作成して、比較検証したものである。継続研究の続報であるが、全11の図に表示した相互の関係性が具体的に把握できる「思考実験」の手法があれば他のインテリア場面にも展開できるものと考えられた。また、結びの中でインテリア教育の設計課題としたい「吹き抜けリビングをもつワンルーム住宅」などの指摘は興味深い内容であった。

007（金、西出、古賀）は、韓国ソウル市内の公営賃貸アパートに住む高齢者を対象にして、日常生活の問題点を実態調査したものである。本報告では、一人暮らしの高齢者と家族と一緒に居住する高齢者の13事例についてインタビュー調査を行ったものである。当該対象世帯の間取りは、2つのタイプであったが、全体として狭小な居住スペースに不満が多かったことなどが指摘された。表示された家具等の中で「キムチ冷蔵庫」等が目立ったことや、Aタイプの住戸には、バスタブがないことなどが特徴的であった。今後、本研究の成果が、高齢者向け賃貸アパートの改善計画に繋がることを期待したい。

008（川本、中村）は、こどもの行動観察をもとに、こども特有の振舞いを「こどもOS（＝こども性）」として捉えて、その行為の類似性からC. アレグザンダーのパターン・ランゲージの手法に倣ってデザイン要素の抽出を試みたものである。特に、こどもOSランゲージからデザインコードへ展開する9つの因子による類型化の手法は、大変興味深く、今後の展開に期待したい。

（座長：若井正一）

□計画3

009（平田圭子ほか）は地域密着型スーパーマーケットのコミュニティ空間となり得る場所について、客の主要動線との関係、計画的、簡易的、偶発的かどうか、飲食物の販売があるかどうかとの関係から考察し、コミュニケーションを目的とする場合は長時間滞在できる休憩スペースが適しているとした。場所の問題だけでなく、時間帯によって集まる人と集まり方が変わることもわかってきていて、今後その方面への展開が期待される。

010（向井智之ほか）は地域密着型スーパーマーケットの休憩スペースの利用状況をアンケート調査から明ら

かにしたもので、店舗により利用方法が異なること、主要動線上にあるものの利用率が高いこと、時間帯によって利用状況が異なることを示した。家族や友人の飲食を伴うものと、一人で時間をつぶすものの違いも指摘した。今後は場所の特徴をよりの確にとらえることが求められるであろう。また、地域密着型スーパーであるとするれば従業員の役割も重要となるであろう。

これらの090、010は一連の研究であり、地域密着型スーパーマーケットの活性化の諸活動と含めて進展することが期待される。

011（市原瞳ほか）は住宅においてトイレ内で行われる行為の拡がり調査し現在のトイレのあり方を再考しようとするもので、排泄だけでなく、突発的行為、時期的行為、習慣的行為が行われることを示した。今回はいかに様々な行為が行われているかを整理して示すことができたという段階であるが、個室だけではないバスルームとの関係、また住宅内のトイレ以外に居る人との関係を含めて、今後の進展が期待される。

012（長谷川公彦ほか）はネット時代における「子供室」周辺の空間構成についてパブリックスペースとの関係を中心に考察し家族との接触の可能性を生み出すような空間構成への傾向を示した。ここでは空間構成を量的におさえる方法を提案している。今回は雑誌に掲載された事例からの分析であるが、今後は子供が実際に何処にいて何をするかという実態に基づく分析、また「子供室」とは何をする場所であるかという議論も必要であろう。

011と012は新しい傾向の研究であり、未だ緒についたばかりの感があるが、可能性を秘めていると思われ、今後の研究の進展に期待したい。

（座長：西出和彦）

□計画4

013 本研究は、生活者の潜在的なニーズを理解・発見する分析手法として提案されている。研究目的は住宅の玄関空間での帰宅・外出行為中に発現する生活者とモノとの接触に関して、生活者の状態や動作の違いによりその要因を明らかにすることで、玄関空間で新たに提案できる機能を考察している。接触の評価の仕方や、その結果の活かし方などについて活発な質疑があった。力作であり、この先の展開が興味深い研究であった。

014 知的障がい児者の療育施設における生活の質向上を図るための継続研究であり、本報では施設知的障がい児の障がい程度と個室・多床室の違いによる飾り付けの実態について報告を行っている。個室・多少室でのテレビの設置状況との関係など、同じ分野の研究者の質問など活発にあった。有益なデータとして引き続き期待したい研究である。

015 人間の生活空間は空間領域ごとに分節化され、

ある空間領域が他の空間領域に接しているときの境界を空間の変節点とし、その変節点である扉を対象に人間がどのように知覚・認知し行動するのかを解析することを目的としている。実験対象となった空間の高さが明確でないこと、具体的にどのように今後活かしていくのか等活発な質疑があった。尚、被験者の数がもう少し多い方が良いと思われる。

016 3年間に開発された枕の商品開発事例4事例(①自由に使える長まくら、②丸めて使えるまくら、③めくって選べるまくら、④通気性のよい低反発まくら)の説明と、販売方法(店頭販売、通信販売)の問題点の説明、まとめ・今後の課題が提示された。商品開発の事例として興味深いものがあった。商品開発についての質問等があったが、今後研究としての体裁を整え、客観的な検証がされることなどを期待したい。

(座長：平田圭子)

□計画5

017 (三平・鈴木) は、働くことの目的や意味が変わりつつある現状に着目し、インフォーマルコミュニケーションを軸に、新しいワークスタイルの在り方を考察した。一般に、オフィスの通路や喫煙コーナーで行われている気軽な情報交換の場が、予め設計に組み込まれているオフィスをピックアップし、訪問調査を行った。空間的仕掛けによって社員の意欲向上や精神衛生面への効果は見られたが、機能面へのしわ寄せから身体的不都合も生じている現状が報告された。視点が現代的であり、この新しい取り組みに対し、質問がみられた。

018 (木村・鈴木) は、玩具に建築の要素を加えることで、新しい玩具の価値を見出すことを目的に、“空間おもちゃ”という新しい概念を構築し、それに基づいたスタディモデルのデザイン・制作を行った。さらに、それを用いて使用に関する実験を行い、その行動・観察記録を報告した。会場からは、材質、あるいは、角や接合部の処理等、安全面に対する質問があり、作品自体に対する関心の高さが窺えた。また、子供の感想は聞けなかったのか、子供同士で遊ばせて欲しい等、概念化の部分に係わる追実験への期待も寄せられ、活発な議論が起こった。

019 (高橋・鈴木) は、3 DCGモデリングの手法であるブーリアン演算を用いて、新しい造形手法を確立しようとしている。デザインの実践を通して、直方体、角柱、円柱、角錐、円錐、球体などの基本立体に演算を施すことで生まれる特有の造形性、空間性が、立体的なコミュニケーションを育んだり、開けた空間を創出したりすることの可能性を示した。設計過程が明快であり、結果の意外性もあって、今後の「ブーリアン造形」への期待が持たれる。新たな造形手法として確立していく為に

は、いっそうの整理が必要ではないか、との意見もみられた。

020 (竹内・鈴木) は、照明が空間を構成する重要な要素となってきた点に着目し、「照明建築」という新たな領域を確立しようとの試みである。概念モデル「wrap light」は、みかんの入れ物に利用されるネットの構造を応用したものであり、大きさによるかさばりや、設置の難しさを解消し、様々なシーンで利用できる構造を実現した。風船も利用できるのでは、という提案もあり、デザイン実験としての面白さにも注目が集まった。また、「建築的照明器具」ではないか、という意見もあり、いずれにせよ、興味深いテーマであることが確認された。

なお、018～020は、作品としての完成度が高く、研究発表というよりは、「パネル発表部門」での発表が、より相応しいのではないかと考えられた。

(座長：松田奈緒子)

□計画6

021 居住環境を考える上で、水廻りの環境が生活レベルのバロメータと言えるだろう。日本においてそうだったように、韓国においても公営住宅から浴室が住宅に導入されたという事実は興味深かった。発表者は、ソウル市内の5つの集合住宅の居住者を類型化し、浴室環境に対する固有のリクエストを統計化した。それを根拠に多様な浴室タイプの企画とデザインに応用している。デザインにおいては、統計結果を超えた創造性も求められるだろう。

022 公共機関の中で最もアクセシビリティが求められるのは、交通施設であろう。特に鉄道旅客施設においては、ハンディキャップのある人のみならず、大型荷物を持つ旅行者にとっても関心の高いテーマである。そのような移動に一時的な制約を持つ利用者全体を交通弱者と呼ぶのは言い得て妙である。発表者は、2007年に開通した空港鉄道の6つの駅を調査し、その結果3つの駅に問題を発見し、改善を求めた。日本にも「交通バリアフリー法」があるのであれば、実効性をいかに高めていくかが重要だ。

023 フランス人と日本人の空間概念の違いがゾーニングといった空間の分節化という視点から明らかになったことは大変興味深い。一つの部屋を季節に応じて、モノの出し入れで多目的に使い分ける日本人の生活感がそのまま反映されている。「作業する空間」「個人の空間」「他人をもてなす空間」などすべてが「こたつ」という装置に集約されていたのもうなずける。日本人は、分節という明確な区分けではなく、結界というあいまいな棲み分けで暮らしてきたとも言える。

024 発表者は、精神の病が引き起こす多くの犯罪者

の住まいがゴミで埋め尽くされていたという事実から、事件と犯罪者の住まいのインテリア環境にある一定の関わりを見いだした。そして、インテリア空間とそこに住まうものの精神病理の関係性を概念図として提示した。将来、インテリア空間のしつらえのわずかな特異性を感知することによって居住者の精神病理をあぶり出すことも可能となるだろう。インテリアデザインと医学の横断領域におおいに可能性を感じた。

(座長：鈴木敏彦)

□計画7

025 本研究は、先進的なオフィスと考えられる日経ニューオフィス賞受賞企業のレイアウト及びコンセプトを調査し、コミュニケーションの場であるミーティングスペースの面積や数、配置の推移の変化を明らかにして、今後のオフィスプランニングにおけるミーティングスペースの規模計画等に関する基礎資料を得ようとするものである。その結果、コミュニケーションに関連するキーワードの増加に伴いミーティングスペースの面積が増加傾向にあることが分かった。近年ではアドホックなミーティングではなく、部署の異なるワーカーが偶々出あえる場での情報交換が重要視されつつあるので、今後は「コミュニケーションの質」という観点からも研究して頂きたいと考える。

026 インテリアコーディネーター制度が制定されて四半世紀が過ぎ、改めて現状を把握して問題点を抽出し、改善の方策を考える時期に来ている。本研究は、昨年の続編であり、インテリアコーディネーターの雇用者である企業の視点から、インテリアコーディネーターの活用実態と今後の展望について論じたものである。企業に対するヒアリング調査及びアンケート調査の結果、インテリアコーディネーター自身とは現状認識においてギャップのあることがわかった。インテリアコーディネーター自身は、エンドユーザーの要求に応えるために幅広い業務を行うことを理想とするが、企業は営業面での期待を強く持っているとのことである。これらのギャップを解消するためにも、調査の結果を、ぜひとも各方面の改善に役立てて頂きたいと希望する。

027 インテリアに関する製図を行う際、これまで基準となるものとしては「JIS A 0150：建築製図通則」しかなく、家具、カーテン、カーペット等のインテリアエレメントに関する規定が存在せず、教育上及び実務上からも表現の標準化が望まれてきた。そのため本学会のCAD部会インテリア製図法WGでは、「インテリア製図の標準化」をそのミッションとし10数年前より検討してきた。今回はそのまとめとしての「インテリア製図通則」の提案である。現状分析を踏まえ、国際規格（ISO）の規定を鑑みながら、我が国のインテリア分野に

おける利用（慣用）等を考慮し、また建築と比較した場合のインテリアの特殊性やCAD利用に対しても配慮して提案を行った。今後は本学会のオーソライズを経て、JIS規格として認定されるよう努力するとのことである。

028 本研究はICカードを用いた社会システム技術に関するものである。これは個人のICカードを用いて様々な面でバリアフリー／ユニバーサルな社会を創ろうとするものである。本研究の範囲では、「電子鍵錠」「電子マネー」「本人認証による情報アクセス権限チェック」の3つを主機能としている。特に今回は、製品の「認知容易性」「使用容易性」の観点から、「カード＝リーダーシステム」のデザインを決定したプロセスについて発表がなされた。製品の仕様は、錠側がノブかレバーか、あるいは自動ドアかで異なり、また利用者が車いすかどうかでも異なる。これら様々な設計条件を整理し試作品が完成した。今後はこの試作品を用いて動作実験等を行う予定であるとのことである。ICカードにより簡単に個人認証が可能となるので、人の動線を容易にコントロールすることが可能となる。インテリア空間における人間行動を変容させる大きな要因になるかもしれない。

(座長：高橋正樹)

□計画8

029（近藤他）は、住宅におけるインドアグリーンの効果を心の安定、癒し、健康の回復とし、男女14名を被験者として心理的・生理的指標を用いて検証している。R-R感覚を用いたストレスの測定を行い、グリーンがある場合、計算時と安静時の副交感神経指標の上昇が優位に大きく、精神的な疲れに対してリラックスした状態への回復が早いという結果を示した。さらに、部屋の用途を考慮したグリーンの具体的な使用例をその効果と共に提案した。100ます計算など負荷の与え方に課題を残したが、R-R感覚を用いたストレスの測定による研究が今後その評価の精度を高める事で、さらに応用範囲が広がると思われる。生理的指標による検証の今後に期待する。

030（川崎他）、031（沢辺他）は一連の発表で、住宅におけるペットとの共生環境を整えるためには、動物の性質・特質を理解した上での家づくりが必要であるとし、人とペットの双方が快適に暮らすための指標として、住宅における共生環境と件をまとめ、ペットの居どころを提案した。習性や本能からみられるペットの行動の視点、それに対するひとの思いの視点、それらをバランスする視点から与件を整理した。その結果をもとに、犬ではペットハウス収納、トイレスペース付収納など掃除のしやすさを考慮した居どころ、猫では、キャットステップや窓際に狩猟本能を刺激する居どころなど具体的

な事例を示した。少子化、高齢化、単身者の増加などにより、犬や猫を飼う割合が増加している。さらに、多様なストレスを抱える現代社会で、ペットの役割は単なる動物の飼育に留まらず、同居する家族として、さらには癒しの対象として重要な存在になっている。インテリアを計画する上で、ペットとの共生を考察する必要性は高いだろう。今後の課題として高齢期のペットとの過ごし方や介護の問題に対応する提案に期待したい。

(座長：長山洋子)

□人間工学1

032は、階段昇降時の空間に対する印象評価、気分の変化、行動評価から、空間の開放性と家事行為（行為目的）が、昇降行動のモチベーションに与える心理的效果を実験的に検証したものである。本研究の背景には、身体的負荷を軽減するバリアフリー設計の考え方に対して、精神的に適正な負荷の中で生活することで身体機能の低下を防ぎ、向上させることができるのではないかという提言がある。ここでいう精神的に適正な負荷とは、個人差が大きいことと、建築的な要素として計画し得る範囲には限界があることは否めないが、ライフスタイルの提案という方向性においては、新しい可能性を感じる。

033は、032の続報であり、成人男女計190名に対するアンケートから、楽しく行っている家事行動、それぞれの家事を楽しく行うための手法、それぞれの手法の各家事別の割合について分析したものである。いうまでもなく、家事行動は義務的行動と余暇的行動の両側面を持つ。また、その家事行動を楽しいと感じるか否かは、個人の価値観に大きく左右されることも事実である。得られた知見が引用されることを想定すると、回答者の属性等、結果の成立条件を明記することが肝要であろう。032、033ともに、ユーザー教育のための研究として、また居住者のQOLに踏み込んだ研究として、今度に期待したい。

034は、高さと幅を変えた8種類の開口部を対象にして、幼児が「寄りつく」開口部の形状を実験から明らかにしたものである。好きな開口部を選んで通過させる行動実験と、遊戯室に常設して自由に遊ばせる自然観察法から、「はいはい」や「中腰」ではなく「通常」の姿勢で通過する高さが好まれることなどが明らかにされている。発達心理学においては、幼児期に全身を動かすことによって外界を探索的に知覚することの重要性が指摘されていることなどを鑑みると、興味深い研究である。幼児が機能性と遊具性のどちらで開口部を判断しているのかは、教示のしかた、行動場面の設定のしかたによっても異なるであろう。

035は、机の囲みの高さや幅を変えた空間を対象にし

て、幼児が「居つく」囲み空間の形状を実験から明らかにしたものである。囲み空間に幼児が滞在した時間、幼児の頭の振りの回数から、高さが低く（700mm）、幅が狭い（400mm）囲み空間の方が幼児の滞在時間が長いことなどが明らかにされている。かつてヨーロッパにおける学習用椅子が姿勢矯正具としてつくられていた話を連想させられる研究である。幼児がその場に長く留まる風景をどう評価するかは意見の分かれるところであろう。環境決定論が通用しにくい領域だけに、教育学や発達心理学の専門家の意見も交えながら研究が発展することを期待したい。

(座長：渡辺秀俊)

□人間工学2

036 トイレブースの折戸と開戸を対象に出入り時の動作を、荷物（リュックサック、キャリーバック）を持った人の身体へのひねりや動作スペースの点から使い勝手を検証している。実験の結果、キャリーバックの方が大きなスペースを必要とすること、また、折戸の場合、動作スペースが少ないことが分かったとしている。フロアからの質問では、被験者のリュックサックの持ち方、女性の衣服の多様性の指摘がされた。被験者が成人男子1名のみであるため、今後は被験者数を増やし、特に女性（衣服違い等）を増やし、検討を深める必要があろう。

037 階段踊り場に設置する縦手摺の有効性について、身体へのひねりや滑り、痛みの点から人間工学的検討を行っている。この3つの視点に対して、足の着地位置、下肢の筋活動、歩行姿勢、手摺の掴み位置から考察している。その結果、縦手摺の使用により、曲り時にひねりが緩和され、脚部の筋活動は小さくなった。また、自然な姿勢が保持されたとしている。フロアからの質問では、縦手摺の場合の歩行速度の変化について、縦手摺の位置（高さ）についての質問があった。それぞれ、歩行速度は若干速くなる傾向がある、縦手摺は通常の手摺より高い位置になるとのことであった。また、避難時の使い方（逆手も考えられる）についても考慮し、研究を続けてほしいとの意見があった。被験者が1名のみでの実験結果であるので、実験結果の信頼性を上げるために、被験者の属性も考慮し、被験者数を増やしていく必要がある。

038 スロープの踊り場を壁への衝突を防止する点から見直し、スロープの「勾配」「長さ」に対応した踊り場の「広さ」「形状（曲がり角度）」を実験により検討している研究である。降りる際には、速度も速くなることが想定され、本研究は必要な視点と考えられる。検討項目は、スロープ勾配の違いと速度、高低差の違いと速度、踊り場での操作の違いと速度、速度と制動距離、高低差を制動距離であり、最終的に踊り場寸法1500mmでは安

全の確保が難しい可能性もあるとしている。フロアからの質問としては、実験時の床材の種類について質問があり、平滑な条件で行い、安全側にとれるような設定としたとのことであった。また、壁が設置されているが、壁の有無は実験にどのように影響するかについて質問があり、あくまで実験の安全を考え、設置したとの回答がなされた。

039 利用者の増加に伴い、ハンドル形電動車いすの接触や転倒・転落の事故が増加しているが、その原因の一つに操作ミスを想定し、使用者の注視の特性をもとに、利用者が考えている走行イメージと実際の走行状況の関係を明らかにすることを目的とした研究である。結果として、1) 障害物による狭窄部の直前では、障害物壁面の角との接触を避けることを強く意識していること、2) 操作に習熟するに従い、注視位置が遠くなる傾向が見られたこと、3) 壁面の有無では、壁面がある方が慎重になる傾向があるなどが分かったとしている。

(座長：白石光昭)

□人間工学3

040は、「ロボットと人間の相互交流に関する試行実験」として行われている一連の研究の続報である。まず思うのは、発表者らの先見の明の確かさである。研究当初、これら研究について当初リアリティを持って感じる事はあまりなかったが、現在建築内にロボットが入ってくる場面は十分想定できる。一方、建築内にロボットが入りコミュニケーションが密になると「ロボットのヒト化」の問題が起り、「ロボット特有」の研究とは何かが必要と問われる。これは本報にも言え、結果の中で人との差異や特徴を強調してもらいたかった。

041は、テーブルにおける座席位置とコミュニケーションに関する研究である。司会や会場からは、コミュニケーションをしている場面やコミュニケーションの種類についての質問が出た。発表者は特に具体的な想定はしていないという回答であったが、「食事」「会議」といった場面設定や、「友人」「上司と部下」といった人間関係等、幾つか条件を設けてもよかったと思う。今後の研究に期待する。

042は、家具の配置によりパーソナルスペースの重なり（個体領域の侵害）が緩和される事を前提に、192件の事例を元に各空間を評価したものである。またそれら結果から、異なった用途の空間についてその類似性を分析したものである。大変精緻な研究であり実用性も高いと考えられるが、今後実際のインテリア設計の場面でこれら情報を扱おうとした時、評価ツールとして具体的にどのようなものになり得るのか、興味のあるところである。

043は、キッチンエレメントの手に触れる部分について使用性の評価項目を整理したもので、発表者の経験を

元に、詳細な調査に基づき整理されたものである。発表時のスライド事例は一つひとつ納得させられるものがあった。キッチンはこの10年で大きく変わっており、例えばIH化による換気扇の高さや、食器洗浄機の普及によるワークトップの広さの拡大等、評価する項目も変わると思われる。評価項目の精度を高めるとともに、引き続き課題を投げかけて頂きたい。

(座長：布田健)

□人間工学4

044 活発な質疑が出された。この研究は、市販正座用いすの評価と感覚評価を行い、座いすの機能条件として座面の高さや傾斜角度、ならびに体圧分布を調べたものである。その結果、理由は明らかにされていないが、座面が大きく高さの高いいすの評価が高かった。機能条件では、座面の高さは、13.5～14.5cm、傾斜角度は5～10°がよいとしているが、その理由は述べられていない。被験者の設定は体格の違いをもとに決めているが、体重の記載が必要と考えられる。また、体圧の測定には、大腿部とふくらはぎの接触面を加えると更に座面の機能条件を明確にできると考えられる。参考文献の記載を希望する。この分野の研究が少ないことを考えると、今後の研究に大いに期待したい。

045 この研究は、特別支援学校における教室用机・いすの開発を長野県地域材の使用を前提に提案された報告である。特別支援学校の児童・生徒の障がい程度は多様であり、家具の提供は教職員の努力と工夫によるところが多いため、学校家具のJISで対応できない特別支援学校用家具の標準化の可能性を確認したものである。試作品は、JISにおける2・4・6号の寸法を基準として、各号数の適合範囲を広げ、いすの座面を前傾可能な角度の設定も行っている。試作品の実使用による検証を行った結果、車いす対応に不具合点が見られ、標準化への対応として前述の3種類を提案した。この種類の研究は、関心をもつ関係者が少ない中で、ユニバーサル社会の中で、重要な意味をもつと考えられる。更に多角的、かつ個別対応を可能とするシステム家具の在り方について今後の研究・実践を期待したい。

055 この研究は、家具メーカーによる展示・体験施設「いすの科学研究室」の来場者による意見や報道された番組や記事などの評価をまとめたものである。展示装置としてシーティング・シュミレータなどがあり、座面と背もたれの寸法・角度を変えながら体圧分布を測定できる。この研究発表は、学会における発表内容として相応しいかどうか、いささか疑問を感じる。その理由は、来場者の意見や報道内容を羅列したものであり、座長としてこの内容から研究という意味合いを見いだすことはできなかった。なお、本発表は、2名による連名発表で

あったが、ファーストオーサーであった発表者が学会会則により発表資格のないことが判明し、急遽二人目の連名発表者による発表を条件に発表の許可を行ったものであることを追記する。

(座長：上野義雪)

□歴史1

047 (塚口) は、モダンデザイン成立の背景を、アヴァンギャルド住宅誕生における諸事情から探る第3報である。今回は、モダンへの反感から容認へと変化する過程を、新聞などのメディアの力と、左派右派といった政局の動向から分析した論考である。その分析の対象を、とくにヴァイセンホフ・ジードルンクとパウハウスに求め、それらに対する反感から容認へと変化していく諸要素を考察している。そしてモダンデザインが容認された強い理由の要素として、とくに、「健康・光・清潔」への関心が高まったからと指摘している。モダンデザインが紆余曲折しながら受け入れられていった過程を歴史的に分析した意義深い論考である。

048 (山田) は、フィレンツェ歴史地区のアルノ川サンタ・トリニタ橋の北の橋詰の東に現存する、ゴシック風で長大な邸館パラッツォ・スピーニーフェローニに着目し、その機能や形態の変容を、絵画・絵図、都市計画図、建築図の各史料から綿密に考察したものである。この邸館は、フィレンツェの他の邸館と比べ著しく大規模で威圧的なものであり、その理由を、市壁とアルノ川の間を押さえる要所に位置するために塔をとまなう都市的(土木的)規模で建造されたからと分析している。とかくインテリア・建築的な視点のみから考察しがちな手法を、都市的な視点から捉えている点は興味深い論考といえる。

049 (高田ら) は、福島県会津町に10棟現存している歴史的建造物「曲がり屋」の空間特性を、平面構成と室空間および景観の視点から分析したものである。とくに室空間の構成からは、曲がり屋ゆえに、直屋型では生まれ得ないツボヤ空間がプライベート空間と外部のパブリック空間との間に存在し、それが各戸の私的領域となり内部から外部への段階的構成を形作ると意味付けている。また景観的には、前面に土蔵と水路・池をセットしたものが80%程度あり(会場からの質問への回答)、魅力的な景観を形成しているとした。また曲がり屋は中門造りとも呼ばれるが、会場から、中門の出入り口と奥まった寝室として使われる「チュウモン」と呼ばれる室の語源の関係はどうか、という質問があったが、これについては今後の検討とした。

050 (新井) は、戦後日本の主要木製家具メーカーとして、天道木工、コスガ、飛騨産業、マルニ木工を取り上げ、各社における主要なトータルインテリアコーディ

ネート家具シリーズに見られる種々の家具スタイルの変遷を歴史的に考察したものである。具体的には、家具スタイルを、伝統的ヨーロッパスタイル、カントリースタイル、モダンスタイル、ジャパニーズスタイルの4スタイルに分類し、各社が得意とする技術や社会背景に応じながら、生産するスタイルの変遷を分析している。そして各社の家具スタイルは、全体として結果的には折衷主義的になったと結論付けた。これからの家具スタイルがどうあるべきかを考えるうえでも、一応は分析しておくべき論考と評価される。

(座長：河田克博)

□歴史2

051 (高橋) は、継続するマッキントッシュの考察の第11回として、「空間分節の手法」を手掛かりに空間構成の特質に取り組んでその最初の発表であるという。先行研究から「部分的変形と二次的構造体」による2つの分節手法を取り上げ、追試的に詳細な事例研究を行なっている。本発表では、後者について「二次的構造体あるいは家具」として項が立てられているが、家具による分節を第三の分節手法として確立していくことが、発表者の分析をより特色付けることになり、先行研究に対する優位性が生まれるように思われる。先行研究に対し分析の枠組をどう展開させていくか、次の発表が期待される。

052 (川崎) は、23回に及ぶウィーン分離派の展覧会において過半の展示デザインを担当したコロマン・モーザーを取り上げ、その展示空間および住宅の室内空間において「フラットな壁面の実現、面の交差する隅部のボーダーの強調、意図的に配された家具」による「簡素で、革新的な」空間の実現とその意義を分析している。上述の三点に着目したところがこの発表の核心であり特色であると評価できるので、この三点の考察を深めて研究の立脚点を確立することが待たれる。例えば、「ボーダーと文様」などは格好のテーマであろう。

053 (八代) は、オーストリア工作連盟の設立メンバーであるヨセフ・フランクについて、保育園と住宅を取り上げて、現況から改装・改修も内容を把握することを通じて当初の空間を推定し、「作品の本質を分析する」ものである。両世界大戦間に造られた、必ずしも理念先行型ではない作品を分析するのは魅力的なテーマであるが、それ故になかなか難しい。発表者は「建築的特性」として、保育園について「中核の存在」・住宅について「機能別ブロック構成」を指摘しているから、「中核と機能別ブロック」という視点から全作品を見てみると、あらたな展望が開けるのではないかと考えるが、如何だろうか。

054 (金田ほか) は、旧谷口邸(大阪府泉南)と旧鴻

池組本店（大阪市此花区）のステンドグラス制作者について、遺構と木内家史料の分析により「木内真太郎」であることが確実になったとするもので、『日誌』を踏まえての手堅い論考である。ステンドグラスなどの工芸品は、工房として製作を行なった可能性があり、木内による「玲光社」の製作組織とその運営、受注と製作の関係などについての報告も今後に期待したい。

055（片山）は、17世紀中頃のパリにおいてサロン流行の端緒となったとされるランブイエ邸と、それを実現したランブイエ夫人の「設計術」に関する既発表論文の続報として、平面図の修正と夫人の設計意図の考察をまとめている。13世紀に市壁外に造られた館を保存しつつ、前庭・大階段・ホール・外大階段・庭園といった新しい要素を導入して都市内の貴族の邸館として整えていく様子は、ヨーロッパ・インテリア史の知られていない一面であり、その解明と紹介という点で意義深い。このインテリアはロココに先行し、外観は新古典主義に先行すると読むことも、また夫人がイタリア出自からイタリア文化の移入の観点から見ることもできよう。

当セッションでは、近代初期ヨーロッパの3編は相互に隣接する研究であって、発表後の交流もあり、継続とその成果を期待する。なお、発表順について、内容と時代の考慮を要望しておきたい。ちなみに、055、051～053、054が自然であろう。

（座長：山田智穂）

□パネル発表

056 リンゴ創作炭VOC吸着性能を有するインテリアオブジェ（小川他4名）：徹果されたリンゴや落下リンゴをウッドセラミックス化して消臭対策を兼ねてインテリアのオブジェにしよとする試みである。リンゴの内部は多孔質であって、室内の空気浄化に役立つという。種類によってもその効果は異なるという。楽しくも環境や不具合果物の有効利用を考えたプロジェクトの発表である。その中にLEDを仕込んで照明にも活用しようとしたなかなか欲張りな提案であった。実物の展示が可能であったならば、より理解が深まったと思われた。

057 杉圧縮木材による椅子（下平、高橋）：軟木であるスギを圧縮加工して、材料強度を増した上で、堅木同様に椅子に活用を試みた事例である。かなり繊細なデザインがなされており、見かけ上は、檜、ブナ等の造形と遜色はない。材料強度の提示はあるものの、製品強度そのものの実験データは示されていない。また、経年による変形や強度変化などの課題も残されている。

058 飾る収納＋隠す収納（泉、木村）-インテリアエレメントとしての衣類収納の新提案-：卒業制作を押し進めた木製の作品例である。見せる収納は手や足、それに肩といった人間の身体の各部分を造形化して、そこに

関連する衣類やアクセサリ類との関連性を持たせたとこに新規的発想とデザインの工夫が見られる。これに比べ隠す収納は折りたたみ機構を取り入れたものであるが、見せる収納に比べテーマ性に未だ戸惑いと迷いが見られた。

059 地域コミュニティの場としての蔵の再生とインテリア空間（早野）：二宮尊徳に深い縁のある地で、古い蔵を再生して地域コミュニティの場を設けようとした試みである。インテリア空間は木の香りに全身包まれるような雰囲気を作り出している。廃材を十分に活用しているとのことであったから、発表の題名や内容をもっと二宮尊徳の「互助」の精神に絞って、組み立てたほうが作品の意図を明確に打ち出せたのではないかと悔まれる。

060 つつむ家（今井、船曳）：伊勢は外宮に続く旧街道に面する場所に立つ住宅作品である。極めて不整形、入り込んだ複雑な敷地に浮遊する内なる空間である中庭をどのように組み入れるかについて勘案したものである。ここでは明記されていないが、内宮と外宮の空間特性の違いについて考察、外宮の特性である包む空間のメタファーである、としている。

（座長：加藤力）

■平成22年度運営委員会だより

□総務委員会

上野義雪 委員長（千葉工業大学）

総会開催後は、主に20周年記念事業学校教室用家具デザインコンクールについて活動を行い、関西で開催された大会において、デザインコンクール事務局とともに表彰式の開催準備、および入賞作品と一次審査を通過した作品（計27点）の展示準備を行った。表彰式では入賞者全員に出席をしていただくことができた。これらは実行委員会の協力を得ることで、表彰式・展示会を無事に終えることができた。実行委員会に感謝したい。

□広報委員会

湯本長伯 委員長（九州大学院）

1）事務ホームページの更新を行った。皆様の情報提供を引き続きお願いします。

最近少しずつ、支部・部会・研究会等についても掲載情報を戴き、アップデートの循環が出来かけていると思われます。

HPの価値の一つは更新頻度にあると言われるので、

会員や役員の方々の更なる更新要求・情報提供を、お願いしたい。

事務HPのURLは、下記です。

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/>

2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています(現在40号)。

メールアドレス登録者は175名です。過去のニュースはホームページからすべて見ることができます。

最も早く会員の皆様に、重要な情報をお知らせする貴重な手段ですので、皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

イベントに合わせた連絡等も考えて、関係者のアドレス一時登録も、過去にさせて戴いた実績があります。

皆様の一層のアドレス登録と、他の方々へのお誘いもお願い致します。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/mail-news.html>

3) 会報は現在、最低でも年間3号、総会後(大会前)と大会後、及び年報(年度最終、総会前)を発行していますが、今回は大変遅れてしまい、まことに申し訳ありません。

記録を中心に春の総会・秋の大会情報も含め、種々の情報をお届け致します。

過去の会報も、ホームページから見ることができます。ご活用下さい。

また少し違った切り口の発行時期や編集内容提案があれば、対応致します。ぜひご意見をお寄せ下さい。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/47.pdf> 48.pdf

4) 広報委員会は、以下のメンバーで活動しております。

また広報委員は6名のみで、今もかなり手薄な状態ですので、皆様のご協力をお願い致します。

広報委員長：湯本長伯

[九州大学大学院・教授、九州支部]

編集委員：片山勢津子

[京都女子大学・准教授、近畿支部]

以上、年報(総会前会報)担当

会報編集委員長：渡辺秀俊

[文化女子大学・教授、関東支部]

編集委員：若井正一

[日本大学工学部・教授、東北支部]

以上、総会后会報担当

会報編集委員長：平井康之

[九州大学大学院・准教授、九州支部]

編集委員：平田圭子 [広島工業大学、中国支部]

以上、大会后会報担当

(毎年、号落ちの関係でズレておりますが、今後は上記を厳守します)

HP・メールニュース編集委員長：湯本長伯

[九州大学大学院・教授]

広報担当総務委員：白石光昭

[千葉工業大学・准教授、関東支部]

東海支部は、最も盛んに活動情報を提供戴いておりますが、メンバーから言うと北海道・東海地域からの情報が薄いので、細大漏らさぬ情報提供を期待します。

どうぞよろしく、お願い申し上げます。

5) 広報委員会へのご意見を求めています。下記までお送り下さい。

interior@design.kyushu-u.ac.jp または JASIS-editor@yahoo.co.jp

□国際委員会

加藤 力 委員長

今回はありません。

□論文審査委員会

直井英雄 委員長

本年度も10編を超える応募があり、現在、審査業務進行中です。今年こそ年度内発行を目指そうと努力を続けておりますが、また年度をまたいでしまうかもしれません。その場合には、どうかお許しください。

小さな学会のせいもあって、この論文報告集、細々とした手作りの状態は脱し切れておりませんが、それでもここ数年、やっと安定してきたのではないかと感じております。学会の基幹事業のひとつとして、この状態がしっかりと定着しますよう、皆様のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。



■平成22年度支部だより

□北海道支部

小林 謙 支部長

今回はありません。

□東北支部

若井正一 支部長（日本大学）

今年の冬は、全国的に降雪量が多く、東北地方でも屋根の雪下ろしや落雪などによる死傷者が例年になく多いことがニュースになっています。また、豪雪地方の山間部では、交通マヒなどで「陸の孤島」となって、雪国の暮らしの大変さが指摘されています。東北支部の特色として、冬の暮らしや雪国におけるインテリアの生活実態などに注目すべきであると痛感しています。

さて、東北支部の事務局は、本年度から下記に移動しております。春先には支部総会を開催する予定です。

日本インテリア学会東北支部事務局：

東北芸術工科大学デザイン工学部 早野研究室
〒990-9530 山形市上桜田3-4-5

□北陸支部

棒田邦夫 支部長（金沢学院大学）

前北陸支部長および理事の小松暁一氏が永年にわたるデザインの教育研究の功績により秋の叙勲、瑞宝中綬章を受章しました。インテリアに関わりをもつ私たちにとって励みとなる吉報で、当支部一同心より喜んでおります。その祝賀会が金沢美大の教員、正会員の村上章彦氏、角谷修氏の発起人会によって2月26日（土）に開催されました。私もこの会に出席させていただきまして、小松暁一氏の功績にあらためて敬服したことをご報告させていただきます。



小松暁一氏との記念写真

□関東支部

岡田悟 支部長（共立女子短期大学）

昨年秋に以下のように見学・講演会を行いました。

日 時：11月28日（日）

会 場：昭和のくらし博物館（東京都大田区南久が原
2-26-19）

内 容：10:30～12:00 ギャラリートーク&ツアー
テーマ「昭和のくらしからインテリアを考える」

講 師：小泉和子館長

参加者：11名

昭和のくらし博物館は、昭和26年に当時の住宅金融公庫の融資を受けて東京郊外に建てられた住宅を、中の家具や生活用具ごと保存し、公開したものです。館長の小泉和子さんは生活史研究所を主催し、重要文化財建造物の家具、インテリアの復元等に携わっていますが、何よりも、ご自身が育った自宅を学習の場としたいというお考えから博物館としました。当日は好天に恵まれ、今回、小泉館長から旧時の暮らしぶりをうかがいながら内部をご説明いただき、参加者は昭和の庶民のくらしから現在のインテリアに対する理解を深めることができたと思います。会員の皆さんも是非訪れてみることをお勧めします。

□東海支部 ー東海支部での支部長選挙ー

建部謙治 支部長（愛知工業大学）

東海支部では、1月14日の支部役員会において、来年度からの新支部長の選挙を行うため、「東海支部支部長選挙細則」の確認を行った。細則により、東海支部選挙管理委員会を組織するため、幹事から2名、幹事以外の正会員からの1名の選出について審議を行い、高橋敏郎（愛知淑徳大学）、河辺紳二（名古屋工業大学）、河田利香（大林組）の各氏とすることが承認された。日程的には、2月初旬に選挙管理委員会が開催され、3月中旬ころに新支部長と新評議員が選出される予定である。この原稿が皆様の目に触れるころには東海支部の選挙結果が出ていることになる。

しかし、問題があつて、選挙権を持つ会員名簿が支部に届いていない。評議員選出には支部会員数が必要であるが、その根拠となるものが名簿である。

学会にとって研究および調査を通じて学術の健全なる発展を図り、その成果を社会に還元することであるが、それ以上に重要なものが名簿管理であることは言うまでもない。学会の構成メンバーを把握し、重要事項を評議する評議員の選出にも、また支部に割り当てられる支部活動費配分にも名簿は欠かせないものである。支部活動に支障が出ないよう速やかに名簿が支部に届けられるこ

とを求める。

本学会はインテリア関連団体でも、学術を扱うことで他の関連団体と差別化される。それゆえ、国際化や協力学術団体として位置づけられ、認められている実績がある。しかし、基本は会員サービスとの両立があって意味のあるものになるのではないだろうか。

東海支部の役員一同は、こうしたスタンスで、支部会員に対して学術的な存在感と、会員へのサービスをこれまで以上に心掛けたいと考えている。

□関西支部

小宮容一 支部長（芦屋大学）

大阪樟蔭女子大学での第21回大会を無事終え、大会長の任務は果たせたかと考えています。実行委員又各地から大会参加いただいた方々には感謝いたします。大会の報告は前頁の『概要報告』をご一読下さい。さて、年末に実行委員の慰労も兼ねて、大阪道修町の町家をリフォームした食事処「かんてきや」で関西支部の忘年会を開催しました。15名の参加があり、大会の裏話などで多いに盛り上りました。今大会で関西支部会員が発表した論文の一部を、支部webに掲載していますので、ご参照下さい。

今後の活動として、役員選挙と支部規約改訂の2案件を抱えています。役員選挙はこの原稿を執筆時点で、本部からの指示・資料待ちです。資料が届けば早速準備し、選挙となります。

支部規約改訂は、2005年2月26日の改訂で「支部評議委員」の選挙を規定してあるのですが、評議委員の職務又評議委員会の権限などの細目がないまま、慣例的に今日まで運営されて来ました。そこで、私が支部長の機会に条項を整備し、今期末までに草案し、総会で決議・決定したいと考えています。

□中国・四国支部

大森豊裕 支部長（近畿大学）

2010年10月18日 インテリア産業協会等と共催で、広島国際会議場にて、「木のまち・木のいえ リレーフォーラム イン広島」を開催。地産地消の新しいモデルの可能性や、木造建築の需要喚起などについて講演とPDを行いました。

2010年10月2日 ミニレクチャー（学生向きの講演会）のNo.11として、恒例になってきている西村正弘氏（NDesign）による「模型制作の実際」を近畿大学工学部で開催。建築学科の2,3年生19名が参加し、模型制作に取り組みました。

2010年11月22日 中国インテリアプランナー協会と共

に、「鞆の浦&仙水島」の見学会を実施。仙水島心で1泊し、洞窟風呂で癒され、23日は松居秀子さんの案内で、坂本龍馬が紀州藩という丸の沈没事件について賠償交渉を行った御船宿「いろは」をはじめ鞆の浦を見学し、その後「大田家」などを各自見学しました。

2011年1月14日 ミニレクチャーの拡大版で、学生と社会人を対象に現在飲食店などの事業で活躍中の奥原誠次郎氏（インスマート㈱）に「飲食店と店舗デザイナー効果的な商業建築へのこだわりー」について講演をいただき大変好評でした。（参加者46名）

これらの活動記録は、支部ホームページに掲載しますので、是非ご覧ください。

□九州支部

車政弘 支部長（九州産業大学）

2010年度は、九州国立博物館にて11月中旬、『市民建築文化展』に協力し、インテリア・建築・都市の文化的側面について、多くの一般市民に展覧して戴いた。他にインテリアコーディネーター協会、建築家協会などが協力した。6日間の展覧者数は、約4800人に上った。

またこの3月、九州インテリアコーディネーター協会協議会主旨の『インテリアフェスタ』に協力し、学会メンバーが講演を行った。同月、インテリア産業協会主催の『トータルインテリアキャンペーンTIC』にも協力し、特に講演会には300名近い参加があったことは、大変良いことだった。

来年度は、何とか自前の活動を展開したいと考えているが、他のインテリア関係団体とも、十分連携したい。



■研究部会だより

□歴史部会

河田克博（名古屋工大）

〈見学会〉今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2010年10月23日（土）（13：00～18：00頃）に開催しました。見学場所は、近代和風建築の樟徳館、江戸時代の鴻池新田会所、そして大阪くらしの今昔館の3箇所。大阪の住宅建築の歴史を、江戸時代から近代までを体験しながら探る、貸切バス移動による半日の行程でした。参加者は貸切バスが満杯になる40名以上。大阪以外からの参加者も多数あり、大阪の住文化に感動し新鮮な知見を得た盛況裡に進行した見学会でした。詳細は、大会見学会の記事をごらんください。

（幹事会）大会に合わせて、10月24日（日）の昼食時

に開催し、今後の事業計画などについて協議しました。
とくに、次年度の広島での大会時の見学会について、実行委員会への協力を図ることを確認しました。

□デザイン部会

佐戸川清 部会長（㈱ゼロファーストデザイン）

今回はありません。

□生産流通部会（休会）

□計画・構法部会

栗山正也 部会長（KDアトリエ）

今回はありません。

□人間工学部会

白石光昭 部会長（千葉工業大学）

今回はありません。

□教育部会

河村容治 部会長（東京都市大学）

1) 第17回卒業作品展および巡回展の開催

2010年10月23日（土）より24日（日）まで大阪樟蔭女子大学記念館1階183教室にて、第17回卒業作品展が「学校教室用家具デザインコンクール」作品展と共に開催された。全国から選ばれた優秀な卒業制作の作品27点を展示した。

大会に引続き本年も立川ブラインド工業（株）とインテリア産業協会の協賛で、東京の2ヶ所で巡回展を開催し好評を博した。

◆タチカワ銀座スペースAtte展：

10月28日（木）～30日（土）

◆インテリアフェスティバル2010

（東京ビッグサイト）

11月17日（水）～19日（金）

2) 卒業作品展優秀作品の選出

10月24日（日）に下記メンバーで審査委員会を実施した。大会閉会式において、郷力大会実行委員長から審査結果（下記受賞者一覧参照）の発表と詳しい講評があった。本年は全体に密度の高い作品が集まり、また世情を反映してテーマも多様化していることが特徴であった。審査では特に「背すじをのばす椅子」と「旅する図書館」

の評価が高く、「境界に活きる建築」と「呉アートコミュニケーションセンター」がそれに続いた。「旅する図書館」は、詩情溢れる作品で見る者に深い感動を与えた。「背すじをのばす椅子」は、研究とデザインの両面をバランスよく追求した作品で、今後の卒業制作の新しいあり方を示した。

[審査委員会]

審査委員長：高橋鷹志（学会会長）

委員：大会実行委員長 郷力憲治

大会実行委員 ペリー史子

教育部会長 河村容治

教育部会幹事 植松暉子

[受賞者一覧]

・最優秀作品賞：

ICSカレッジオブアーツ インテリアアーキテクチュア&デザイン科

水島 康孝 「旅する図書館」

・優秀作品賞：

愛知淑徳大学 現代社会学部現代社会学科都市環境デザインコース

荒納 志帆 「背すじをのばす椅子」

広島工業大学 環境学部環境デザイン学科

浜本 拓幸 「境界に活きる建築」

広島大学 工学部第四類建築プログラム

猪野 雄介 「呉アートコミュニケーションセンター 多様な順路をもつ美術館」

・奨励賞：

岐阜県立高山工業高等学校 建築インテリア科

林 健一 「Taiko stool」

2011年度も第18回卒業作品展の開催を予定している。参加を希望される方は、河村（kawayo.ji@tcu.ac.jp）まで問い合わせください。



卒業作品展大阪会場

□住宅部会

直井英雄 部会長（東京理科大学）

今回はありません。

□CAD部会

川島平七郎 部会長（元東横学園短期大学）

今回はありません。

■インテリア学大系特別委員会

委員長 湯本長伯（九州大大学院）

インテリア学大系発刊のために構想・編集等の担当を担うWGは、2007年に任意組織として作られ、既に4年以上の活動を続けています。この間より本格的な段階に進むため、インテリア学大系・特別委員会（委員長：湯本長伯・九州大学大学院教授）として改組し、種々の問題についての議論をまとめ、次の具体的なアクションに向けての報告の準備をして参りました。特別委員会としては秋の大会時に関連のシンポジウムを開いたり、さまざまな準備と調整を進めると共に、この間、会報等でもお知らせしましたように、ある程度の内容をまとめて仮の目次を作りましたので、複数の出版社と話し合っ、商業出版の可能性を探って参りました。

しかしながら出版不況も長引いており、学会刊行物であれば出版社が刊行に応じてくれた時代ではもはやなく、なかなか色よいお返事は戴けませんでした。また時間の推移とともに、時代は電子書籍に移りつつあり、益々難しさが増しているとも言えます。委員長の力不足で申し訳なく存じますが、事態を大きく変換することは難しいと判断致しました。

そこで特別委員会委員長としては、「商業出版の可能性はほぼ無い」という前提で、電子出版やウェブ出版など新しい方法を考えながら、事業の進展を考える事やむなしの結論に至りました。

新2011年度からの活動は、これまでまとめて来た議論をもう一度振り返りながら、シンポジウムという形で学会員みなさまと議論と内容を共有し、その記録を何らかの形で電子化し、先ずは第一版の出版物にすることを考えております。

もちろん、その成果物の内容によっては出版社の慎重な判断を覆し、「商業出版の可能性」が出て来ることも期待はできます。そうしたことも含め、事態打開のため

に新しい形の活動を開始致します。

さて会議に参加され、アドバイスを戴いて来た現在のメンバーは、高橋鷹志（会長）、西出和彦（事務局長）、栗山正也（計画部会長）、松本哲夫（剣持デザイン研究所）、小原誠、湯本長伯、白石光昭、渡辺秀俊、村口峯子、谷口久美子、安武弘子、といったところですが、新しい形の活動を開始するに当たって新メンバーも公募しますので、ぜひ応募をお願い致します。

具体的には、

1. 時期：2011年6月ころ

2. 場所：九州大学有楽町オフィス

（案内図 <http://www.kyushu-u.ac.jp/university/institution-use/tokyo-office/tokyo-office-floor.html>）

3. 次第：追ってホームページ、メールニュース等で広報致します

何卒宜しくお願い申し上げます。

■平成22年度理事会議事録

総務委員会

日 時：平成22年10月24日（土）12:00～12:50

会 場：大阪樟蔭女子大学

出席者：＜理事＞ 高橋、上野、大森、加藤、
河田（建部代理）、河村、栗山、小宮、沢田、
白石、直井、西出、日原、棒田、松本（吉）、
湯本、若井、渡辺 ＜記録＞ 松崎、穴沢

配布資料：

- 1) 平成22年度日本インテリア学会第2回理事会議題
- 2) 日本学術会議協力学術研究団体の指定について（協力学術研究団体登録台帳、規定）
- 3) 第21回大会、第22回大会梗概集目次
- 4) 日本インテリア学会会則
- 5) 平成22年度日本インテリア学会第1回理事・評議員会議事録（案）および総会議事録
- 6) 日本インテリア学会入退会者名簿（2010.06.03～2010.10.19）
- 7) 書籍紹介「天才と発達障害～映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル」岡 南 著

議 事：

1. 開会宣言（白石）
2. 会長挨拶（高橋）

3. 大会長挨拶（小宮）

4. 出席者の確認

理事24名のうち、委任状5通、出席18名で理事会の成立に必要な定足数1/2以上を満たしていることが確認された。

5. 前回議事録の確認（資料5）

資料5の通り、異議なく承認された。

6. 日本学術会議「協力学術研究団体」の指定について（資料2）

平成22年9月16日付けで本学会が日本学術会議の協力学術団体に指定された旨、報告があった。

7. 非会員による大会発表に関する対応（資料3）

会費未納のため除名処分を受けた前会員が、本大会の研究発表者として参加申込を行い、梗概集に原稿が掲載されたことが判明し、その対応を検討した。

- ・発表者の所属企業は賛助会員であるが、大会での研究発表者は正会員または準会員でなければならない。
- ・除名処分の理由（長期に及ぶ会費未納）からも再度の正会員登録はふさわしくない。
- ・本来、掲載前に発表者を確認すべきであるが、これを機にチェック機能の確立が必要である。
- ・会員数や発表件数の増加は望まれるが、会員の管理は重要である。

今回は、連名の発表者を入会扱いとし、発表を交代させることで了承された。非会員である発表者名は、削除することとし、発表者でないことを公にする。

8. 第23回大会の開催について（大森）

次年度の大会は、中国・四国支部を中心として広島工業大学で開催（大会長：森保洋之氏）される。日程は10月22～23日で、テーマは「都市とインテリア（仮）」とする。

- ・発表を大会初日とし、懇親会を2日目に行なう要望があったが、以降検討する。

9. 学会事務局の移転について

現事務局の長年に渡る負担に配慮し、本部事務局を金沢学院大学へ移転することが了承され、棒田理事より挨拶があった。

- ・事務局の所在地等、会則や学術研究団体として必要な変更は、事務局と総務委員会で確認する。

10. 研究部会からの報告

- ・CAD部会より「製図通則」をまとめているとの報告があった。
- ・部会の統廃合について、効果的な活動が続いている教育部会、歴史部会、人間工学部会は存続し、計画構法部会、デザイン部会、住宅部会を統合する案で検討を進めている。別途、CAD部会と大系WGなどが活動中であるが、これらは時限的な特別部会として継続し、来年度から新体制で部会運営に臨みたい。

- ・部会活動の現状については問題を認識しているが、他に手段がないため、統廃合を進める方向で了承したい。

- ・1, 2年は、新たな体制で運営して様子をみる必要があると考える。

11. 支部からの報告

特になし。

12. その他

- ・高橋会長より小原名誉会長からの手紙が紹介された。

- ・入退会者について（資料5）

資料の通り、平成22年6月3日～10月19日における入会者は17名、退会者は3名で、異議なく承認された。

- ・支部活性化のためにも新規入会者を各支部に通知してほしい。

- ・分野を越えてインテリアをトータルに考え、日本の伝統を見直す研究を進めるべきである。

- ・インテリアの学術的な研究発表として、既往研究の重要性を再認識し、レベルアップする必要がある。また、生活や居住について総合的な研究を進めるべきである。

- ・引用や参考文献など、学会の倫理や著作権の問題についても厳しくする必要がある。

- ・湯本理事より書籍「天才と発達障害～映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル」（岡 南 著）の紹介があった。

■連載『インテリアの行方』

湯本長伯（九州大学）

会員の意見や提言を開陳する場として、この「インテリアの行方」というコラムを設け、会報41号（2008年3月6日発行）より、掲載を続けて参りました。

第一号の松本直司先生から始まって、さまざまなご意見ご提言を戴いて来ましたが、このたび編集委員会から執筆者として推されて改めて読み直してみると、この間に何度も繰り返される不況の波や、その都度もろくも崩れてしまう日本のインテリア文化の底の浅さなどと考え合わせて、本当に我が国の「インテリアの行方」は暗い闇へとまっしぐらなのではないかと、暗澹たる想いにかれます。

それと共に、我が「インテリア学会の行方」もどうなるのか、伸びない会員数、学会としての役割が明確にならない曖昧なポジション、社会のさまざまな主体との連携の薄さ、そもそも大学等の学校教育の中でも、真っ先に削減や縮小の対象にされたりする有様で、30年前に立

てた予測、すなわち「30年後の2010年には建築とインテリアのマーケットが逆転し、石の文化の西欧のように建物は壊さず、インテリアをやり変えながら永く住み長く使う文化と社会になる」という予測が全く成り立っていません。30年前には相次いで、I CインテリアコーディネーターやI Pインテリアプランナーの資格が作られ、いずれの資格にも初代会長・小原二郎先生が関わられたことは、会員の皆様も良くご存じだと思います。その後もさまざまな資格が乱立しましたが、結局I Pは元国家資格どころではなく受験者も1000人を切ってほとんど無い始末ですし、「福祉」を絡めた新しい資格も一時ほどの元気はありません。初代会長はじめ先人が、その力量・ケイ眼をもって礎を打ち立てられたインテリア文化の環境を、我々あとに続く者がしっかりと受け止めて、さらに発展させていなければならないものを、それが出来ていないことに忸怩たる想いですし、また申し訳なく思っています。

インテリアコーディネーターやインテリアプランナーという、当時の国家資格の試験委員や問題作成に関わった経験のあるものとして、どんどん社会的な存在が小さくなって行ってしまう現状は、不況やグローバル化という言い訳はあるものの、本当に若い人たちに対して申し訳なき次第です。そこで私は個人的にですが、もっとインテリアや建築の文化を社会的に知らしめる必要があると思い、ここ数年間、「建築とインテリア」という生活空間の意味、文化性、社会的意味、等々を知ってもらうために、展覧会の開催を続けています。その中でも比較的規模の大きいものでは、

- アルバ・アアルト展（アルバ・アアルト財団と協同）
 - 吉阪隆正展（吉阪隆正展実行委員会と協同）
 - アーキニアリングデザイン展（社団法人・日本建築学会と協同）
 - 市民建築文化展（独立法人・九州国立博物館と協同）
- などです。

これらを実施するには相当な費用が必要でもあり、また多くの人々の協力も必要です。もちろん理解がもっとも重要ですが、これらを東京から九州に職場を移した直後から隔年ペースで行い、そこで苦労した分だけ身の回りに味方を増やし、また一般市民の方々の理解も増やして来たと、自己満足？しています。意外と寄付が集まった時期もありましたが、なかなか私が止めないで次々と続けるので、そのうち呆れて協力を惜しむ？人もあり、このところは自腹で数十万円の費用を出さないとなんかなくなっています。

それでも止める気は、私は無いのです。何故なら、状況はますます悪くなっているからです。

先人たちの時代には、社会にも希望が満ちていて、我々の生活空間は我々の文化と直結しており、そこを大

事にすることは文化を大事にすることであり、我々の未来と子供たちを大事にすることなどと、必ずしも言う必要は無かったかも知れません。しかし今では、建築や土木に向かう学生は地方では気は確かかと疑われ、生活空間の文化が如何に大切なものかということが、社会の中で全く意識されていません。不幸にして、地震被害による一時の復興景気が生じたとしても、底の浅いものは直ぐに冷えてしまいます。もっと深い理解に裏打ちされた、本当の生活文化を打ち立てないと、これからますます状況は悪くなると、一人？いや皆さまと一緒に、心を痛めているところです。

そこで我がインテリア学会も、設立時の熱気を思いだして再び立ち上がって、インテリアの文化を打ち立てるために社会の一線で戦い、また社会的な存在感を強めることも含めて、インテリアに関連するさまざまな団体や関係省庁などとも連携し、もう一度インテリアが輝き、学校や職場でも花形となるよう、社会的な活動あるいは運動を強めて行くことも、いまこのような状況では形振り構わず進めて行く必要があるのではないのでしょうか？

もちろん以上のようなことを、ただ単に高橋会長にお願いするばかりでなく、危機意識を持って何がしかの行動を起こす必要性を感じている一人一人が、自分に出来ることを少しでもやりながら前進することが、いま必要なのではないのでしょうか？そこで幾つかの提案・提言を試みてみたいと思います。

私はこの10年と少しを「産学連携センター」というやや変わった研究センター、すなわち異種異質なセクターの連携・融合によって、新しい知の生産を行うという研究センターで過ごして来ました。その経験から思うことは、やはり異種異質なものの連携は、新しいものを生む強力な方法論だということです。かつて畏友である栗山正也氏のお手伝いをして、『インテリア懇談会』というものの立ち上げに関わったことがあります。これは不十分に終わってしまった恨みはありますが、まさに社会的に幅広いウィングでの連携・協力によって、閉塞状況を打開しようという試みであったと思います。

その後も協力して幾つかのことが出来ました。例えば、「インテリアの資格」を作るだけでなく、本当の「インテリアの職能」を打ち立てようという試みの一助として、『インテリアの仕事』という本を、インテリアプランナー協会のメンバーと共につくりました。かなりしっかりとした現状調査に裏打ちされた、我が国で初めての本格的な「インテリアの仕事」が分かるものでした。さらに『インテリアプランナー試験問題解説』は、インテリアプランナーという資格者の集団が、自分たちの後輩となるであろう人たちのために書いたということが大切かと思います。さらに『インテリア工事標準仕様書』は、小原誠先生の大変な労作ですが、これもインテリア

プランナー協会やインテリアデザイナーズ協会の方たちと協同で出来たことが重要かと思います。まさに幅広い連携協力は、大きな成果を生むのですが、さらに言えば、日頃社会の中で職能者として仕事をし、実務者として社会に向けても発信を続けている方たちは、かなり敏感に社会の状況を肌で感じており、問題意識も高いと感じます。一時期、インテリア学会で行う研究会の参加者の多くが、学会員ではなく I P 協会の会員であった時がありましたが、これは学会として笑えない惨状であったと同時に、実務者の高い問題意識の現れかと感じました。

以上のようなことから、先ずは I P や I C 協会の会員であれば、学会の研究会等に会員並みの待遇・会費で参加できるようにし、あわよくば会員増加にも繋げつつ、活動の活性化も図ったら如何でしょうか？関西や東海は盛んだと思いますが、他の支部や東京ではほとんど、普通の学会が当たり前のように行っている研究会・見学会が出来ていない。研究部会再編の議論はさらに加速させつつ、もっと活気ある学会とする方策を、一つ一つ重ねて行くことが大切でしょう。

私は I P インテリアプランナーという資格の行く末を案じて、東京 I P 協会の立ち上げに関わり、また現在は I C インテリアコーディネーターという資格の行く末に責任を感じて、福岡 I C 協会の会長となり、そして九州全体の I C 協会会長も務めている立場ですが、実情を良く知る者の一人として、必ず良い協力・連携が出来るはずだと思っています。

もちろん、こうした職能・資格団体との連携・協同ばかりでなく、経済や産業も含めた関係省庁との連携・協同や、幾つあるか分からないインテリア系の資格団体、そして分担が不明確な幾つかの学会とも大同団結して、インテリア系では『インテリア学会』がすべてをまとめている、というくらいのプレゼンスとコミットメントがあって良いと思います。そういう点では、基準・仕様が

ら業界・官界までの幅広いウィングを誇る『建築学会』に倣っても、何一つ恥じることはないと思うのです。

以上、通常の学会活動の枠をはみ出ることになるという提言は、ある意味過激かも知れませんが、余り残された時間はありません。

「インテリアの行方」を語る前に、我が「インテリア学会の行方」について考察し、提言させて戴きました。

■速報：平成23度の大会のご案内

開催日：2011年10月22日（土）研究発表会、23日（日）見学会（尾道、鞆の浦の予定）

会場 広島工業大学

*応募要項など詳細は6月にご案内いたします。

（中国四国支部長 大森豊裕）

■訃報

（元 日本インテリア学会事務局長 藤城幹夫氏）

長年、日本インテリア学会事務局長を務めていただきました藤城幹夫氏は、平成22年12月5日、ご逝去されました。生前は、日本インテリア学会の事務局長として、学会の運営、事務作業など学会活動の裏方として誠心誠意、協力を惜しむことなく任務を遂行されました。ここに、心から哀悼の意を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

（総務委員長 上野義雪）

■ 編集後記

総会後の会報をお届け致します。1ヶ月後の11月発行の予定でしたが、さらに数ヶ月遅くなりましたことを、お詫び申し上げます。

総会や大会の記事は、確かに既に終わったことの報告ではありますが、少し経った時点で、記録としての重要性が出て来ると信じて、きちんとした記録の掲載に努力しています。

また記録だけではなく、会員各位の意見交換も学会として大切です。そうした意見交換の場・コラムとして、『インテリアの行方』を連載しています。このコラムは、当初から会員の皆様に開かれたページですので、ぜひ投稿も戴ければ有難く存じます。何卒よろしく、お願い申し上げます。

なお、本号の編集段階で東北関東大震災が発生いたしました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

(編集委員：渡辺秀俊)

■日本インテリア学会会報第48号 (2011. 4. 5発行)

編集者：渡辺秀俊、若井正一、湯本長伯

発行者：高橋鷹志 (日本インテリア学会長)

広報委員会：渡辺秀俊、若井正一、湯本長伯、
片山勢津子、平井康之、平田圭子、
白石光昭

■事務局

日本インテリア学会

事務局長 西出 和彦

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1

FAX：03-5841-8515